第２１章　山形県Ａ高等学校
―地域及び周辺学校との連携―

校長がビジョン形成と外部との連携に努め、教頭が校内組織をまとめるという両者の学校内外におけるリーダーシップの発揮を特徴としている。キャリア教育の強化（インターンシップ就業体験学習、キャリア・カウンセリングの充実、外部講師の積極的活用等）や地域・周辺学校との交流（部活動交流、老人福祉、社会福祉等の交流、ボランティア活動、赤十字活動等）を活発化させることで生徒の自発性や積極性を促している。なかでも小学校との連携授業「小学生へのパソコン教室」は、特色ある活動の一つとして特筆できる。

１．調査の方法
（１）調査時期

調査訪問日：10 月 27 日（水曜日）13:00～　第一日目　校長へのインタビュー
10 月 29 日（金曜日）13:00～　第二日目　教頭へのインタビュー

校長・教頭インタビューをそれぞれ２時間ほどおこない、学校運営要項、研究集録、その他資料収集した。特に、校長・教頭のリーダーシップ、地域及び周辺学校との連携、県内初の総合学科としてのこれまでの取り組み、学校内部組織の活性化、学校文化（教師文化）の改善等について話を聞いた。

（２）収集資料

学校要覧、パンフレット、校長による会議等の資料、小学校との協同学習実施報告書、その他、会議資料等。

２．学校の概要
（１）沿革

昭和２年の実家学校の開設をもって創立としている。昭和 23 年、新制高校として認可される。以後、数度の学科改編を経て現在に至る。学校は市街地からやや離れ、周辺を農地に囲まれた地域に立地している。全校生徒数 475 人、うち女子生徒の割合が 65%を占める（平成 16 年度）。教職員数 58 人。

（２）教育目標

現在、キャリア教育のさらなる充実を目指している。マッチング的な進路指導を脱し、体験的な学習やボランティア活動など、キャリア教育のなかの学びを重要視している。そのなかで教科教育の在り方や、カリキュラムにおける選択履修やガイダンス機能をさらに改良していく。

Ⅲ　教　育　目　標

1．教　育　目　標

心豊かに、たくましく生き抜く社会人の育成を目指し

知性と情操　自立と連帯　気力と体力を培う。

2．スクール・イメージ

『磨こう個性を

拓こう未来を』

3．経　営　方　針

(1)　学科の特性を生かし、豊かな人間性と個性を伸ばす活力ある学校づくりに務め、新たな校風の樹立を目指す。

(2)　研修の充実を図り、教職員の相互理解を深め、組織的な学校運営に務めるとともに指導力の向上を目指す。

(3)　地域社会に信頼され開かれた学校を目指して、学校改革を推進する。

4．本年度の重点目標

(1)　基礎・基本を重視した「わかる授業」を実践し、学力の向上を図る。

(2)　「キャリア教育」を充実させ、望ましい職業観・勤労観を身につけさせる。

(3)　奉仕・体験的学習を通して、「豊かな心」「チャレンジ精神」の涵養を図る。

(4)　「礼儀正しい生活態度」を確立し、社会で活動できる力を育む。

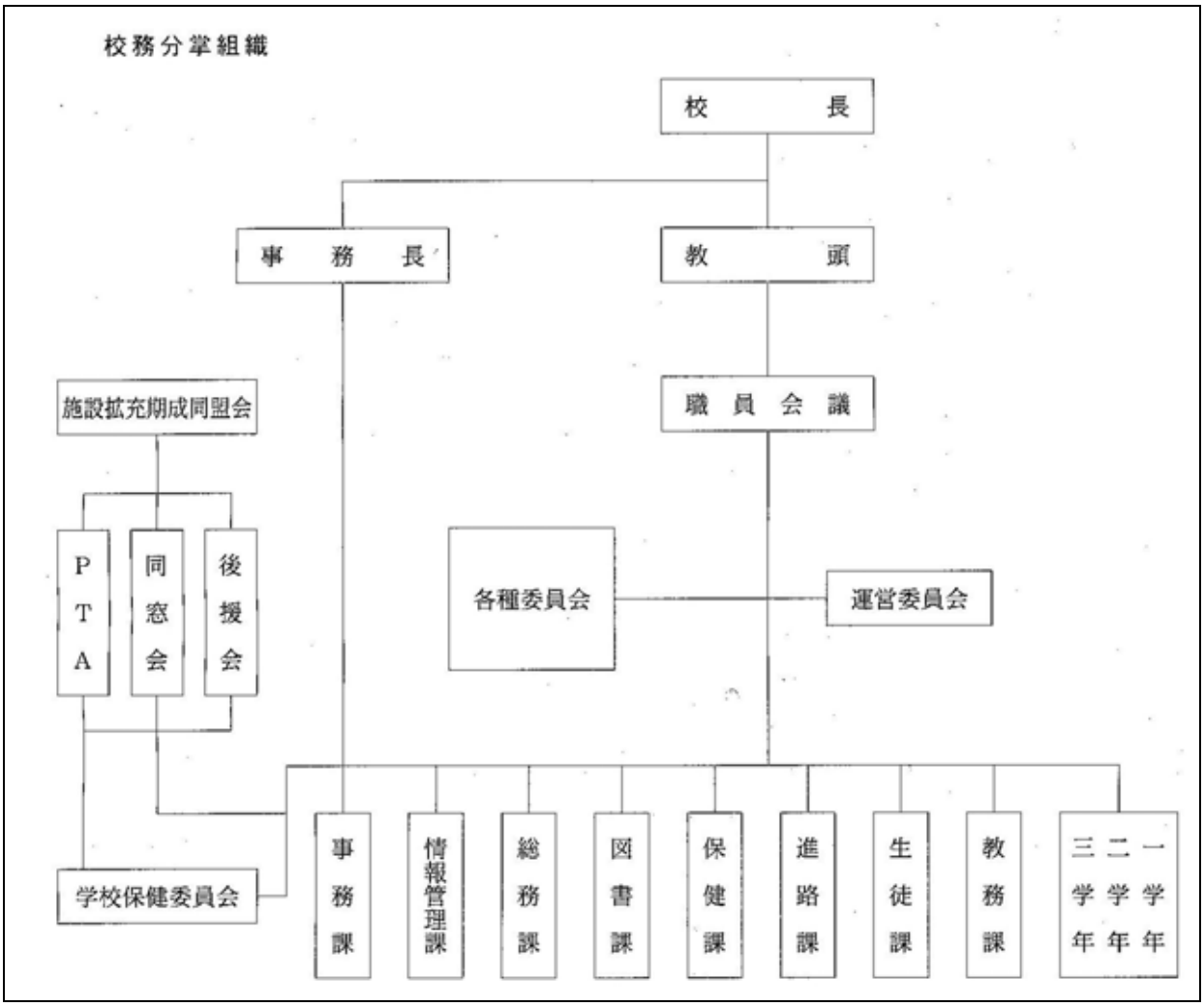
(5)　保護者や地域との連携を密にし、信頼される「開かれた学校」を推進する。

(6)　教育環境の整備とその推進に努める。

（３）学校の内部組織

校務分掌組織は、オーソドックスな体制をもっている。（校務分掌図参照）そのなかでも運営委員会は、校務分掌組織のなかの核といえる。運営委員会は、各課や学年の代表そして校長及び教頭で構成されるが、校内の意見集約や企画・立案が上げられて検討する場として重要な位置を占めている。

各先生は、各課と各学年にまたがるように所属する。例えば、一学年のホームルール担任をもち、生徒課に所属する、というようなかたちである。若い教員であれば、経験のあるベテラン教員でもある各課の課長と学年主任からいろいろな側面でアドバイスも受けることができる体制といえる。（この点については教頭のリーダーシップところでも触れる）



３．特記すべき調査結果

（１）学校管理職のリーダーシップ

１）校長のリーダーシップ―ビジョン形成と外部との連携づくり―

校長がビジョン形成と外部との連携に努める。さらにキャリア教育に力を入れるために、外部との連携を積極的に行っている。

校長は、これまでのキャリア教育の捉え直しをしっかりとおこなうことを現在の中心的な課題として認識している。すなわちマッチング的な進路指導から、体験的な学習としてのボランティア体験やキャリア教育を進め、そのなかでの学びを重要視する。そして、そのなかで教科教育やカリキュラムを見直していく。またインターンシップなどの取り組みの成果と課題を見直し、関係機関（行政・企業・地域の大学他、中学校や小学校）との連携を今後ももっと密にしていく努力が必要であると指摘している。

また、同様の課題を持つ高校での教頭経験も役立っている。

本年度の重点目標　（平成16年度）

(1) 基礎・基本を重視した「わかる授業」を実践し、学力の向上を図る。

⇕

・きめ細かな指導で、学ぶことの楽しさを体験させる。
・生徒の学ぶ意欲を高めるための、授業の工夫と改善を図る。
・新しい学力観「学ぼうとする力」「学ぶための力」「学んだ力」

(2)「キャリア教育」を充実させ、望ましい職業観・勤労観を身に付けさせる。

⇕

・自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる。
・生き方への自覚を深め、将来を考えることから学ぶ意欲を引き出したい。
・ガイダンス機能と、相談活動を充実させるために、校内組織・指導体制の見直しを行う。

(3) 奉仕・体験的活動を通して、「豊かな心」「チャレンジ精神」の涵養を図る。

⇕

・学ぶことと、生きることのつながりを考えさせる。
・人間は多くの「かかわり」の中でこそ成長できることを実感させる。
・「体験」を通して、大人になる基礎を培う。

(4)「礼儀正しい生活態度」を確立し、社会で活動できる力を育む。

⇕

・礼儀や身だしなみ、社会性を身に付けた社会的行動力を培う。

(5) 保護者や地域との連携を密にし、信頼される「開かれた学校」を推進する。

⇕

・学習の場を、学校から地域へ広げ、地域の教育力の活用を図る。
・地域の教材化として、地域の自然・文化・産業等の教材化を図る。
・本校教育の特色を、積極的に地域社会に発信する。

(6) 教育環境の整備と、その推進に努める。

A 高等学校

２）教頭のリーダーシップ―校内組織のとりまとめ―

校長によるビジョン形成と外部との連携・推進の一方で、教頭は校内組織をまとめ、意思集約に努めている。A 高校は、県内でも若い教員が比較的多く配置されており、また、地域との連携に興味・関心が高い教員が多い。教頭は、彼らの要望や希望にできるだけ沿うかたちで対応し、彼らの自発性や主体性を尊重しながら、向付けと、支援を心がけている。校内組織では、運営委員会を特に重要視し、これを軸として校内の意見集約に努めている。（前述、校務分掌組織図参照）教頭は、運営委員会から出る案はすべての教員に関わるという意味で重要であると指摘する。また、前述したように、すべての教員は各課と各学年にまたがるように所属している。一人ひとりの教員を把握し、意思疎通できるように、また連絡や伝達の経路をしっかりと確保する意味でも、運営委員会において各課と各学年の長としっかり連携がとれていれば、学校全体として動きがとれるし、また学校全体の動きを把握できる。
前述したように、若い教員であれば、経験のあるベテラン教員でもある各課の課長と学年主任からいろいろな側面でアドバイスも受けることができる体制といえる。教頭から見て、若手教員を育てる組織の機能を確保する意味でも、運営委員会とそこに出席する各分掌の長との連携を重要視している。

（２）地域連携による総合学科高校としての特色のある教育活動
A 高校は、地域連携に関して実に多様な活動をおこなっており、非常に大きな特色となっている。（「地域との連携及び開かれた学校づくり事業一覧」参照）キャリア教育の強化として、インターンシップ就業体験学習、生徒の自発性の向上とキャリア・カウンセリングの充実、外部講師の積極的活用などがある。また、地域・周辺学校との交流として、部活動交流、老人福祉、社会福祉等の交流、ボランティア活動、赤十字活動などがある。これらを積極的におこなうことで、学校教育活動を活性化している。このうちの活動のなかには、授業活動として認められるものについては、これを積極的に認定していけるように取り組んでいる。こういった地域との連携事業と、日頃の生徒の学習が結びつくことで、今後の生徒のキャリア教育や進路選択に好影響を与えるようにと、そのつながりが構想されている。

地域との連携及び開かれた学校づくり事業一覧

A 高等学校

１地域との連携

① 小学校　　小学校児童に対する本校生徒によるパソコン授業
② 中学校　部活動の交流　男女バスケ・女子バレー・ソフトテニスなど
　　周辺中学校と A 高校教員交流会の開催
③ ポイント講師など地域の人材を積極的に活用　今年度７名を予定
　その他　　外部講師の活用
④ 授業における交流
　老人福祉　　公民館ゲートボール同好会との交流
　課題研究・総合的な学習
⑤ インターンシップ　　各企業・役所・幼稚園・保育所等
⑥ 生徒会ボランティア活動　　駅・通学路清掃　福祉施設訪問
⑦ ＪＲＣの活動　　ふるさと福祉祭り等の手伝い　花いっぱい運動　　国民文化祭
　　福祉施設訪問　保育園訪問
⑧ 個人でのボランティア活動
⑨ その他の部活動　　美術部　壁画作成　作品展示
　　華道部　作品展示
　　食物部　福祉施設訪問　クリスマスケーキ作り
　　音楽部　えがおコンサート等への参加　養護学校との交流
　　吹奏楽部　定期演奏会　　ホール　福祉施設などに招待状
⑩ 学校行事　　体育祭・学校祭へ保護者・地域の方々の参加
⑪ 体操教室の開催
⑫ 体操部後援会の設立　　公開演技の実施
⑬ 大学との連携　　大学訪問　　講演会の開催　　学校評議員会への参加
⑭ 国際交流組織との連携　ロシアから聴講生の受け入れ
⑮ 小・中・高一貫　　町バレー教室

２開かれた学校

① 学校ホームページ作成・更新
② 学校評議員会　　今年度から授業見学を実施
③ 学校説明会（中学校教員対象）　　※中学生の保護者対象説明会は検討中
④ オープンスクール（中学３年生対象）
⑤ 中学生への説明　随時実施　　中学校での説明・本校への来校生徒への対応
⑥ 中学校訪問（10 月以降）
⑦ ＰＴＡ総会（４月）公開授業を実施
⑧ 中学校へ　ガンバッテマスの発行　生徒の活動状況報告
⑨ マスメディアを通じた広報活動　　新聞・テレビ等への働きかけ

例えば、インターンシップ（職業体験）は、一年生と二年生でそれぞれおこなっている。インターンシップ担当の教員は、進路科に所属している教員である。当初は、希望する生徒のみだったが、生徒自身にも教職員にも意義が強く認識されたことによって、生徒全員がインターンシップをおこなうようになった。A 高校の中心的な取り組みといえる。評価も高い。

学校の合計約 90 社の地域企業・自営業等の協力を得て行っている。現在でも多くの関係者の協力の中で実現されているが、今後の課題は、生徒の希望する全ての職種のインターンシップを用意することである。

2003年度　　A高校インターンシップアンケート結果

（生徒アンケートより）

インターンシップが進路選択に役立つ理由

・仕事のつらさが、わかるから。現実を知れた。（多数）
・仕事をしてみていろいろなことを学ぶことができた。（多数）
・いろんな大人の人の話をきくことができた。（多数）
・実際に見て体験して、その仕事の内容がよく理解できた。（多数）
・社会人になることへの意識が高まった。（多数）
・入りたい企業や就きたい職業について知ることができた。（多数）
・実際仕事をしてみて、自分に向いている職業かどうか知ることができた。（多数）
・社会人としてのあいさつ、言葉遣い、マナーがわかった。（多数）
・自分の就職したい仕事を体験できた。（多数）
・働く厳しさを知ることができた。（多数）
・社会性が身についた。（多数）
・普段学校で学べないことを学ぶことができた。（多数）
・興味のなかった職業に興味が持てた。
・本当になりたい職業を体験できた。
・自分が今しなければならないことを教えてもらえた。
・お客でなく、逆の（売る）立場になることは、とてもよい経験となった。
・社会人になる上で、今足りないものがわかってきた。
・社会人としての人付き合い（人間関係）を学べた。
・こういう仕事も素敵だなと感じることができた。
・自分の進路について再び考えるチャンスとなった。
・社会人の目線で職場を見ることができた。
・仕事の面白さがわかった。

（３）小学生へのパソコン教室

１）ねらい

「小学生へのパソコン教室」とは、A 高校生徒が近隣の小学校児童に直接、情報処理指導を行うもので、科目「情報処理」の一環として、小学校との連携授業として行っている。小学校側３、４年生の計３クラス、高校側工業・商業系 30 名が参加し、期間は２カ月間 10 時間を基本として行っている。高校生が小学生に教えるなかで、学ぶ意義や達成感を感じ、また地域にも貢献している実感が、今後の学習の取り組みへの意欲を向上させることがねらいである。

２．企画のねらい

小学校では「総合的な学習の時間」が導入され、環境・国際理解などの題材に並んで、「情報処理」をテーマとした学習活動が展開されている。小学校の現場では、コンピュータを使う時間や設置台数は限られており、情報処理に関わる学習をする際に、コンピュータ（インターネット）を活用しきれていないという現実があった。

一方、本校の課題研究（工業・商業）や工業基礎（工業）、情報処理ｂ・ＯＡ実習（商業）では、日々の授業でコンピュータを使い、各種ソフトウエアの活用、インターネットを使った情報収集や検索、そこで得た情報を分析し、発表・発信する力を学習している。その本校生徒が、小学校児童の活動を支援すれば、以下の効果が期待できる。

①本校生徒が教える立場になることによって、日々の授業と違った視点を育む。
②児童との関わり合いの中から、本校生徒がコンピュータの活用技術についての理解を深める。
③本校生徒が協同作業へ参加し、学びあったり学習活動を支えあったりすることで、日々の授業で学ぶ意義や学習の達成感を味わう。
④小学校の児童が、高校生と活動を共にすることで、年齢層に応じたコミュニケーションをとる力を育む。
⑤総合学習の時間において児童が活動することによって、高校への敷居が低くなる。

これらの効果が期待できるものの、従来までは時間的な制約、場所（施設・設備）的な制約などが大きく、高校生と小学生が協同学習を行うことは困難であった。しかし、２００１年７月にシステムの更新が実施され、クライアントサーバーシステムになり、産振棟の８０台のパソコンがＬＡＮに接続され、比較的快適にネットサーフィンできる環境が整った。そこで、本企画では、課題研究・情報処理教育の一環としてパソコンを活用し、各学年の学習テーマを設定し、高校生が手伝うことにより、小学生との協同学習の実現を目指す。

昨年度、初めて実施した内容を総括し、さらに充実した内容になるように検討し、充分協同学習の効果が出るように綿密に計画し、実施できるように努める。

３．授業計画

現在、　　小学校の３年生２クラス（計４５名）と４年生（３９名）を対象に、前述の実施日・実施内容等を予定しています。２学期に小学生が本校を各学年５回訪問し、生徒が授業を行います。実施後、本企画の評価を生徒、児童、両校の教職員によって行います。

２）内容とその評価

他の活動も指摘できることであるが、この「小学生へのパソコン教室」でも実施後のアンケートを取るなど、事業そのものをきちんとフィードバックし、教育の効果や改善点を探り、今後に活かしている。その意味で点検・評価もきちんとなされている。アンケート評価を行ってさらに活動を充実させると共に、小学校側から「他に高校が貢献できることはどんなことがあるか」などについて聞き取るなど、高校がどのようなかたちで地域（周辺学校）に貢献できるのかを探求している。

「小学生へのパソコン教室」主な内容

３年生第１回 10/7　商業（ＯＡ実習選択者３１名）担当

- ガイダンス
- 起動と終了
- キーボードとマウスの操作

３年生第２回 10/21

- ペイントで絵を描こう

３年生第３回 10/28

- タイピングの基礎
- かんたんワープロ（かな入力）

３年生第４回 11/18

- デジタルカメラで撮影した写真を使い、カードを作成しよう

３年生第５回 11/25

- インターネットをさわってみよう

４年生第１回 10/2　工業（工業基礎選択者１７名）担当

- ガイダンス
- 昨年度の復習（キーボードとマウスの操作）
- タイピングの基礎（ローマ字）

４年生第２回 10/9

- らくらくワープロ（ローマ字入力）

４年生第３回 10/16

- デジタル写真を加工しよう

４年生第４回 10/23

- カードを作成しよう

４年生第５回 10/30

- インターネットで調べてみよう

「小学生へのパソコン教室」における生徒のアンケート結果

Ｑ２　授業を担当してよかった（ためになった）ことは

工業（４年生担当）

人に教えることの難しさがわかった。（８名）
楽しく小学生とふれあうことができた。楽しく会話ができた。（４名）
自分自身の基礎知識の復習になった。（２名）
教えるためには準備をしっかりしなければならないことがわかった。
小さい子供がかわいいと思えてきた。
教えることによって小学生が変わってきた（新たな可能性を感じた）。

商業（３年生担当）

楽しく小学生とふれあうことができた。楽しく会話ができた。（１１名）
教えることの大切さがわかった。（５名）
教える立場の人の気持ちがわかった。（４名）
人前で話すことに自信がもてた。（３名）
あらためてパソコンのことを知ることができた。（３名）
授業の事前準備で、グループで話し合ったこと。（２名）

Ｑ５　授業をしてから、学校生活に自分自身の変化は感じられたか。

工業（４年生担当）

はい　　８名　積極性が出てきた。（３名）
子供がかわいいと感じるようになった。（２名）
子供との接し方に積極性が出てきた。（２名）
やさしくなった。（１名）

いいえ　　９名

商業（３年生担当）

はい　　１０名　積極性がでてきた。（２名）
子供と楽しくふれあうことができるようになった。（２名）
子供がもっと好きになった。（２名）
やさしくなった。（２名）
教えることが楽しいと思えるようになった。（１名）
人前で話すことに自信が持てた。（１名）
年齢の違う人ともｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝがとれるようになった。（１名）

いいえ　１８名

実際に教える立場を経験することによって、授業すること自体は楽しかったが、「教える立場の難しさや辛さ」を実感したようです。しかし、児童との活動の中で、「辛さ」よりも「児童が一生懸命に聞いてくるので、それを教え、わかってもらえたときの楽しさ」も多く感じたようです。

次年度以降も、継続していった方がよいという結論でした。

連携授業をすることによって生徒自身が変化したと感じたことについては、半数がなんらかの変化を感じ、「積極性」や「優しさ」を自覚したようです。

今後、両校の担当者で今年度の総括を実施し、次年度以降の連携授業の「継続」するか「打ち切り」するか、また継続する場合の「実施内容」「実施方法」を、検討していかなければならないと思います。

３）担当教員の資質・力量

「小学生へのパソコン教室」は、企業での勤務経験のある教員が企画し、彼を中心として展開されている。連携への積極的で前向きな姿勢と、情報というハード面・ソフト面の知識や技能が要求されるという条件から、この事業が実現できている主要因は、担当教員の資質力量によるところが大きいといえるが、これまで述べてきたような地域連携とキャリア教育という学校経営全体を支えるビジョンが、こういった事業を可能としていると思われる。（加藤崇英）